満蒙開拓の痕跡をたずねて

―山形県にあった「日輪兵舎」〔序章〕―

松山　薫

一、はじめに

戦前期の日本においては、中国東北部（以下、当時の呼称で「満州」と表記）への日本人農業移民の大規模送出事業が国策として推進された。その中に、青少年の集団を送出対象とする「満蒙開拓青少年義勇軍」という制度があった。本研究は、未成年者の集団移民というこの特異な制度が、いかに大きなうねりとなって日本全国に浸透していったかを、同制度のシンボルともいわれた「日輪兵舎」という建造物を通して探ることを目的としている。「日輪兵舎」とは、満蒙開拓青少年義勇軍制度において、青少年の送出訓練の中核を担った茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に数多く建てられた、木造円形の宿泊研修施設の、いわば固有の名称である。ところが、同制度の普及に伴い、これを模した建物が当時全国各地に多数建てられるという現象が生じた。このことは今日一般にほとんど知られておらず、どこに何棟存在したかも明らかではない。そこで、これらの「日輪兵舎」にまつわる諸事実を掘り下げることによって、満蒙開拓事業の展開過程を具体的に理解し、さらに戦前期の人々をとりまいていた環境や価値観を知る試みとしたい。本研究は当時満蒙移民送出の「先進県」といわれた山形県を対象とし、まず本稿で山形県と満蒙開拓とのかかわりを概観したのち、内原の訓練所の日輪兵舎建設に山形県出身者がいかにかかわったかを明らかにする。そして、次稿以降は、山形

県内に実際に建てられた「日輪兵舎」について述べる。

二、山形県と満蒙開拓

（一）「満蒙開拓発祥の地」

戦前期における満州への日本人農業移民の送出は、一九三〇年代初頭の深刻な農村不況と、一九三一（昭和六）年の満州事変を契機として活発化した。一九三二（昭和七）年から一九三四（昭和九）年にかけての試験移民期間を経て、一九三六（昭和一一）年には、広田弘毅内閣のもとで、二〇ヵ年に一〇〇万戸の農家を日本内地から満州に移住させるという大規模移民送出計画が重要国策として閣議決定され、さらに一九三八（昭和一三）年になると、満蒙開拓青少年義勇軍が制度化された。官民あげてこれらの事業に取り組んだ結果、終戦時には満州に約二七万人の在満日本人開拓関係者が存在していたという（満洲開拓史刊行会編　一九六六）。「満蒙開拓」と総称されるこれらの移民事業は、満州における日本の権益の確立へ向けた政治的・軍事的関与の強化と同時に、内地農村の深刻な不況や余剰労働力問題の解決を大きな目的としていた。したがって、長野県や東北、北陸地方といった寒冷地・高冷地や積雪地の農村において、より積極的な開拓移民の送出がなされた。一九四五（昭和二〇）年五月頃における都道府県別開拓民及び満蒙開拓青少年義勇軍の送出数をみると、最も多いのは長野県（三万七、八五九人）で、第二位が山形県（一万七、一七七人）であった（満洲開拓史刊行会編　一九六六）。こうした送出上位県においては、農村問題が当時それだけ深刻であったともいえる。加えて、山形県に関しては、加藤完治や石原莞爾といった、当時の日本人の対満州観に大きな影響を与えた人物が、山形県と特に縁が深かったということも、当時の県民の間における満蒙開拓思想の普及と関係があった可能性もある。

のちに満蒙開拓の指導者となる加藤完治[1]は、一九一五（大正四）年に山形県立自治講習所の初代所長に就任した。加藤は自治講習所で県内中堅農民の教育を図り、大高根青年修養道場や、萩野開墾地を設立し指導にあたった。この山形時代に、庄内地域出身者をはじめとする自治講習所の門下生から、山形の農村では二、三男には就農すべき農地がないという窮状を訴えられて衝撃を受けたことが、のちに加藤が満蒙開拓に邁進したきっかけの一つであったといわれている。一九二五（大正一四）年より、加藤は山形県出身の農民を朝鮮半島に実験的移民として送り出し、その結果「鮮満農業移民は必ず成功するとの確信」（「拓け満蒙地方めぐり3　山形県の巻」『拓け満蒙[2]』第二巻第二号　一九三八）を得た。それを満蒙開拓国策化推進運動として実行に移す契機をもたらしたのもまた山形県人で、陸軍予備役の角田一郎（山形県東村山郡大郷村［現山形市］出身）（山形県編　一九七一）という人物である。角田は自ら構想した「満蒙経営大綱」を一九三二（昭和七）年一月に加藤のもとに持参し、加藤はそれに賛同した。二人は各界の有力者を訪ねて「大綱」の実現を熱心に働きかけた。当時関東軍の参謀であった石原莞爾[3]（山形県鶴岡市出身）はこの案を支持し、移民訓練に必要な土地・建物を現地（満州）で提供してもよいとまで言った。さらに同年六月には加藤は石原によって、「屯墾ニ関スル意見具申書」を石原に提出していた満州国軍事顧問の東宮鐵男に奉天で引き合わされ、この出会いによって移民構想はより具体化された。これらの過程を経て、政府関係者および陸軍当局の間で当初は優勢であった、本格的な満蒙開拓は不可能もしくは時期尚早とする意見は次第に後退し、同年八月についに退役軍人五〇〇人による試験移民計画が国会を通過した。満蒙開拓の国策化への道がひらかれたのである。

こうした経緯から、山形県は「満洲移民発祥の地」（前出『拓け満蒙』記事）と称される地位を占め、「山形県自治講習所といい、大高根青年道場といい、萩野村昭和開墾地といい、何れも全国的に名を知られ」（佐藤　一九七七）た、いわば満蒙開拓の先進県であった。また、庄内地方の三郡（東田川郡、西田川郡、飽海郡）全体を送出母体とし、満州に「庄内郷」の建設を目指した方式は、その後の最も典型的な分郷運動の先鞭をつけた（満洲開拓史刊行会編

一九六六）とされ、分村・分郷形態における一類型として、複数の郡など広域を送出母体とする「庄内型」の名を満蒙開拓史にとどめている。

（二）満蒙開拓青少年義勇軍

当初、成人の集団移民から始まった国策移民は、日中戦争の発展による応召者や、軍需産業への労働力需要の増加により、一九三六（昭和一一）年の二〇ヵ年一〇〇万戸移住計画の実現が早くも困難視されつつあった。そうしたなか、新たな移民開拓の担い手として、未成年層に目が向けられるようになる。一九三七（昭和一二）年一一月に石黒忠篤、加藤完治らが提出した「満蒙開拓青少年義勇軍編成ニ関スル建白書」を受けて、同年十二月に拓務省は異例の速やかさで「満洲青年移民実施要綱」を作成し、翌年から数え年一六歳から一九歳までの者を対象とした「満蒙開拓青少年義勇軍」の制度を開始した。義勇軍の訓練生に応募し、採用された少年たちは、茨城県東茨城郡下中妻村字内原（現内原町内原）に設置する満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に入所して内地訓練を受けたのち、渡満することとされた[4]。この内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所（以下「内原訓練所」と表記）の所長には、一九二七（昭和二）年より日本国民高等学校（茨城県西茨城郡宍戸町［現友部町］）の校長を務めていた加藤完治が就任した。加藤は皇国思想と結びつく独特の農本主義的な教育理念に基づいて、少年たちの開拓教育を推し進めた。教育内容は、学科、教練、武道、作業などを含むもので、入所した訓練生はラッパや太鼓を合図に規則的な団体生活を行った。朝の日課として「日本体操」（または「皇国運動」。いずれも［やまとばたらき］と読む）とよばれる独特の体操を行い、「万歳」の代りに「弥栄（いやさか）」と唱和するなど、内原訓練所独特の行動様式が少年たちに教え込まれた。

初年度の一九三八（昭和一三）年度には、全国から二万四、三七四名が内原訓練所に入所したが、こちらにおいても

長野県出身者が一番多く一、四九九人、次いで山形県が一、二〇一人であった。山形県から最初に内原訓練所第一期生として入所した元義勇隊員の沿革と回顧録をまとめた藤原編（一九七四）によると、

「内原訓練所の加藤完治先生は、元山形の自治講習所において数年間教鞭をとり、子弟や友人をしたって募集要項をながし、県内の各部落においては加藤完治先生の名前を知らない者が、いないと言ってもよいほど、義勇軍の名と同時に聞こえるようになった」（原文のママ）

という状況であった。

終戦までに、全国から満蒙開拓青少年義勇軍として内原訓練所を経て満州に送り出された少年の数は、いくつかの異なる数字があって正確を期すことは困難であるが、内原訓練所に残っていた送出名簿によると、計八万六、五三〇人にのぼっている（満洲開拓史刊行会編　一九六六）。

近代以降の世界の移民史をひもといてみても、青少年を主体とし、しかも武装移民の性格を帯びた開拓者集団を、これほど大量に送り出したのは、非常に特異な事例であるとされる。満蒙開拓青少年義勇軍という制度がこれほど多くの青少年を満州に向かわせた背景には、農村の疲弊に加え、加藤完治という強力な指導者の存在と、教育界やマスメディアを巻き込んだ一大キャンペーンがあったと考えられる。すなわち、学校教育や青年団などの社会教育制度をとおして、組織的に満蒙開拓推進のための啓蒙活動が行われ、その一方でさまざまなニュース映画やドキュメンタリー映画、歌、演劇、出版物などが、いっそう少年の満州への憧れを喚起したと思われる。

二、内原訓練所の日輪兵舎

（一）日輪兵舎とは何か

ところで、この内原訓練所を語る際に必ずといっていいほど言及されるものとして、「日輪兵舎」とよばれる独特な形の建物がある。日輪兵舎とは、円錐形の屋根を持つ木造円形の建造物（図1）で、考案者は熊本県出身の古賀弘人[5]という建築家である。開拓訓練生の共同宿舎兼教室として建てられた日輪兵舎は、訓練生の学科教育、食事、休憩、就寝など、学習や生活全般の場であり、標準型で直径三六尺の日輪兵舎一棟に小隊六〇人を収容するように設計されていた。「モダン日輪兵舎―満蒙開拓青少年義勇軍内地訓練所―」（本誌特派員記）と題された『拓け満蒙』第二巻三号（一九三八）の記事によると、杉皮葺きの屋根と南京下見板張りの外壁をもつ「日の丸型」の建物で、「出入り口には文化住宅にある様なポーチ」が設けられていた。他にも面会所、郵便処、加工所など内原訓練所の多くの建物が円形であった。日輪兵舎はそ

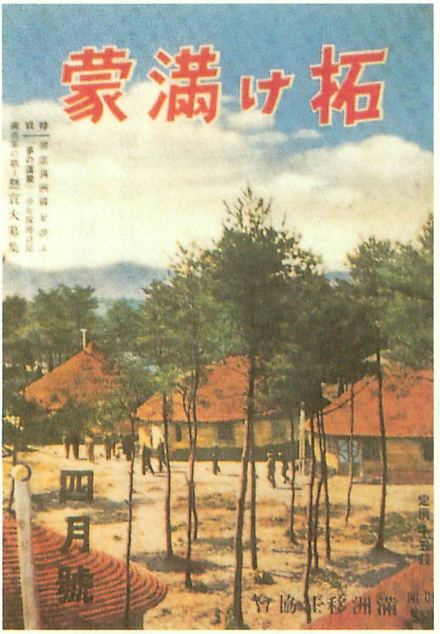

図1　満蒙開拓青少年義勇軍訓練所（茨城県東茨城郡下中妻村字内原［現内原町内原］）の展望（円形の建造物が日輪兵舎）『拓け満蒙』第2巻4号表紙（1938）

の形状から太陽（日輪）をかたどったものとされ、加藤完治の唱導する皇国思想に基づいた農本主義と結び付けられて、同訓練所の象徴ともいうべき存在となった。

考案者の古賀弘人は、「なぜ日輪兵舎と称するか」と題する『拓け満蒙』第二巻三号（一九三八）所収の文章のなかで、

「父の慈相と威力を持つ

日輪兵舎の名称は型それ自体が日輪の型を表現するのみならず、その性能が日輪の意義にピッタリと合致するが故に日輪の名称を冠せられたものである。

平時にありては指導者を中心とする教育の殿堂となり一旦有事の場合は何時なりとも転じて城塞の目的を達し得る。是れは日輪が天下万物を育てる父の慈愛であり乍ら一旦怒れば赫々何者をも焼き尽す威力の二相を備へる夫れと実に髣髴たる相通するものを有するが故に敢て日輪兵舎と命名する。」

と述べている。さらに、

「点を中心とした円の合成力は素人の手に成り乍ら合法的構造であり、構造美も自然に備わる点は見る人をして実に然りとうなづかしむる。」

と自賛しているが、この「素人」でも建てられるというのは開拓地建築として肝心な点の一つでもあった。前述の記事（本誌特派員記者　一九三八）によれば、日輪兵舎は「満蒙の奥地を開拓する先遣隊の人達が地均しから完成迄一日でなし遂げる」ことを前提とした簡便なものであり、「今この内原でも全然素人の少年たちが従事してゐますが、四十名で即日一棟宛完成させて」いるとのことであった。また建造費が坪当たりほぼ一〇円と安いこと（当時、中流住宅で坪あたり一〇〇円程度）も利点であった。多数の義勇軍訓練生を収容する宿舎を早急に建設するためには、日輪兵舎はまさに適当であったといえよう。

なお、内原訓練所史跡保存会事務局編（一九九八）によれば、古賀弘人が日輪兵舎を最初に建てたのは一九三六（昭

和一一）年六月のことで、場所は奉天軍の第一管区靖市安司令部の敷地内であった。内地においては一九三七（昭和一二）年に茨城県西茨城郡宍戸町（現友部町）にあった日本国民高等学校の女子部が火事で消失した際、残った材料で古賀が内原に建てたのが第一号だという。

（二）内原訓練所における日輪兵舎の建設と山形県出身者

一九三七（昭和一二）年末に拓務省が「満洲青年移民実施要綱」を決定した直後、内原訓練所予定地では日輪兵舎の建築が続々と開始された。実は、この作業のかなりの部分を山形県出身の少年達が担っている。前述の『拓け満蒙』第二巻三号の記事（一九三八）には、「二月二十五日迄に六千名の青少年義勇軍を収容する宿舎を完成する為に、山形県から二百五十名の少年が建築班として昨年暮入所し、元旦から之に着工して殆ど完成せんとして居ります」とある。ただ、この記述は同年翌月発行の『拓け満蒙』第三巻四号の「青少年義勇軍の発足　先遣隊に殺到した青少年の意気」と題する満洲移住協会宣伝部による記事と、日時や人数の記述が異なっている。すなわち、「内地訓練所である内原には速急に五千人の訓練所を作らねばならぬ。先遣隊の入所に先つて内原建設班を求めなければならない。それで山形、宮城、香川、群馬、新潟の先進五県へ一月末を締切として先遣中の先遣を求めた。山形の如き一月十五日内原入所と云ふ無理至極な募集を依頼したが流石に先進県だけあつて百三十一名の青少年がきつちり一月十五日に内原へ堂々と先鞭をつけて入所して来た。そして二月十日頃には六百五十三名の内原建設班が打揃つて凛々しく日の丸宿舎の建築を猛烈な勢ひで進めて行つた。」（満洲移住協会宣伝部　一九三八）ということであった。さらにこの数字と、藤原編（一九七四）に記載された数字との間にも若干差がある。藤原編（一九七四）所収の年表によれば、一九三八（昭和一三）年一月一四日に一二七名が山形を出発、翌一五日に内原訓練所に入所、次いで第二次先遣隊として二月一三日に山形班六五名が入

所、となっている。しかし、いずれにしても、一月一五日に先遣隊として入所した山形県出身の訓練生が日輪兵舎建設に従事していた事実は、藤原編（一九七四）所収の元義勇隊員の回想記からも確認でき、内原訓練所開所時の多数の日輪兵舎建設に、山形県出身の少年が全国に先駆けて携わっていたことにはかわりはないようである。なお、内原訓練所史跡保存会事務局編（一九九八）には、「内原訓練所に最初に建てられたワラ屋根の日輪兵舎」の前に、山形県出身者数十名が並ぶ、記念写真とおぼしき写真が掲載されている。

また、この内原訓練所建設の際に建築主任を務めた渡辺亀一郎という人物が、やはり山形県出身者であったことも着目すべきである。内原訓練所史跡保存会事務局編（一九九八）によると、渡辺は山形県東置賜郡和田村（現高畠町）出身で、山形県自治講習所の第四期生として、加藤完治の教えを受けていた。もともと建築関係の仕事の経験が無かった渡辺は、古賀弘人から日輪兵舎建築の技術を学んだという。そして、内原訓練所建設の責任者という大任を与えられ、日輪兵舎の表入口にポーチを付けるなどの独自の改良を加え、内原訓練所の大部分の日輪兵舎を期日までに完成させたが、心労が重なったためか、開所後まもなく急逝した（内原町史編さん委員会編　一九九六）。

これらの例からもわかるように、山形県出身者と加藤完治の間には、加藤が山形を離れて一〇年以上経ったのちも、さまざまな人的パイプが繋がっていたようである。

（三）内原訓練所の象徴としての日輪兵舎

こうして、内原訓練所の敷地には日輪兵舎が続々と建てられ、終戦時には敷地内に約三五〇棟近くも建ち並んでいた。[6] 日輪兵舎は、「現在でも多くの元義勇隊員から〈心のふるさと〉などと呼ばれ」（上　一九七三）、「満蒙開拓青少年義勇軍の代名詞でありシンボル」（櫻本　一九八七）であった。

「日輪舎」または「日の丸兵舎」などとも称されたこの日輪兵舎の特異な姿は当時のメディアにもしばしば取り上げられ、ニュース映画、小説、演劇、歌などの題材とされた。そのため、「日輪兵舎」の名称は当時世間一般にある程度広く知られていたと考えられる。たとえば、福田清人の小説『日輪兵舎』（一九三九）や、これを近田光男が脚色した同名の演劇があった。この演劇は、一九四一（昭和一六）年に新国劇の東京劇場で上演された（佐倉　一九四一）。ほかに巽　聖歌の詩集『日輪兵舎の朝』（一九四四）、キングレコード「世紀の若人」のB面に収録された井口小夜子の歌「日輪兵舎」（花形登喜雄作詞・大熊能章作曲。歌詞の一番と三番は、櫻本［一九八七］に所収）などがあった。

三、全国にあった「日輪兵舎」

（一）満蒙開拓青少年義勇軍制度の普及と各地の「日輪兵舎」

筆者はこの日輪兵舎を、満蒙開拓事業に関する認識を社会に広げた媒体の一つとしてとらえ、青少年の満州への夢をかきたてた象徴としての役割に着目している。そして、日輪兵舎という建造物へ考察を加えることを、当時の人々、とりわけ青少年をとりまいていた戦時下の環境をより現実に即して理解する方法の一つとしてとらえたいと思う。

日輪兵舎は、建造年代と建造の意図がきわめて限定的な、特殊な建造物である。その「意図」の直接的な体現ともいうべき建物の形それ自体、人々に強い印象を与える力を備えている。こうした特徴の分析を通して、満蒙開拓そのものの象徴としての日輪兵舎が果たした役割を探ることができると考える。

さらに、筆者がとりわけ関心を持っているのは、内原訓練所以外にも「日輪兵舎」と称される同種の建物が各地に存

在したという事実である。内原訓練所の日輪兵舎が有名になると、各地の学校、地元の教育会、地方自治体、拓殖関係の団体、民間財団などの所有する農場その他に、相次いでそれを模した建造物が、おもに宿泊研修施設として建造された。しかしながら、本稿冒頭でも述べたように、この事実に関する詳細は明らかではない。

したがって、筆者の第一の関心は、満蒙開拓関連で全国各地に建設された日輪兵舎に類する建造物の存在を一つでも多く確認し、できるかぎり包括的な記録を作成することにある。この作業を通して、満蒙開拓という国策が、どのような過程を経て、いかに日本の国土空間のすみずみへと浸透していったかを実証したい。

各地の「日輪兵舎」はそれぞれ「日輪舎」などと若干異なる名称で呼ばれていたり、外柱の間隔が広くて円形というより多角形にみえたり、オリジナルともいうべき内原訓練所の「標準型」（たとえば**図2**、**図3**）の完全なコピーでは必ずしもないことがあるが、[7] ここでは戦前期（一九三七年以降）に農林業訓練などのために建てられた、円形に近い平面形を持ち、外観が相似している建造物を、「日輪兵舎」と総称する。筆者はこれまで、内原訓練所を含めた日輪兵舎の存在を、二〇〇四年一〇月現在、当時の満蒙開拓関連の文献調査などにより、全国一八都府県計二九ヶ所（一つの施設に複数棟の日輪兵舎が建っていたとしても、一ヶ所と数えている）確認している。これだけでも、当時の全国的な満蒙開拓運動の高まりに日輪兵舎のイメージがいかに密接に付随していたかを物語るといえよう。今後の調査の進展によって、さらにその数は増えると思われる。

そして第二に、これらの作業を通して、さまざまな教育機関・組織が、いかにこの特異な建造物とかかわって青少年の教育を行ったかを知り、多数の青少年の満州移民を可能にしたメカニズムを理解する一手段を得たいと考えている。また、所在地が確認された日輪兵舎のうち、現存するものはごくわずかであるが、そのなかには「戦争遺跡」として保存されているもの、登録有形文化財にして活用を図る計画が現在練られているものなどもある。現存する日輪兵舎の、歴史の証人としての価値が、今後ますます高まるであろうことは想像に難くない。

（二）「興亜教育」の隆盛

このように戦前期において日輪兵舎が各地に「伝播」していった経緯としては、前述のようなメディアの影響とともに、人を介した直接的な作用が考えられる。すなわち、内原訓練所は義勇軍の訓練生のほかにも、さまざまな人を研修のために受け入れていた。各地の日輪兵舎はその直接的な成果ではないかという考えである。内原訓練所では、訓練生以外に、学校の児童・生徒から教職員、各地の青年団や農業団体、大学生、公務員、公社などの新入社員に至るまで、多くの団体をいわば大陸開拓精神の涵養と称して受け入れることが

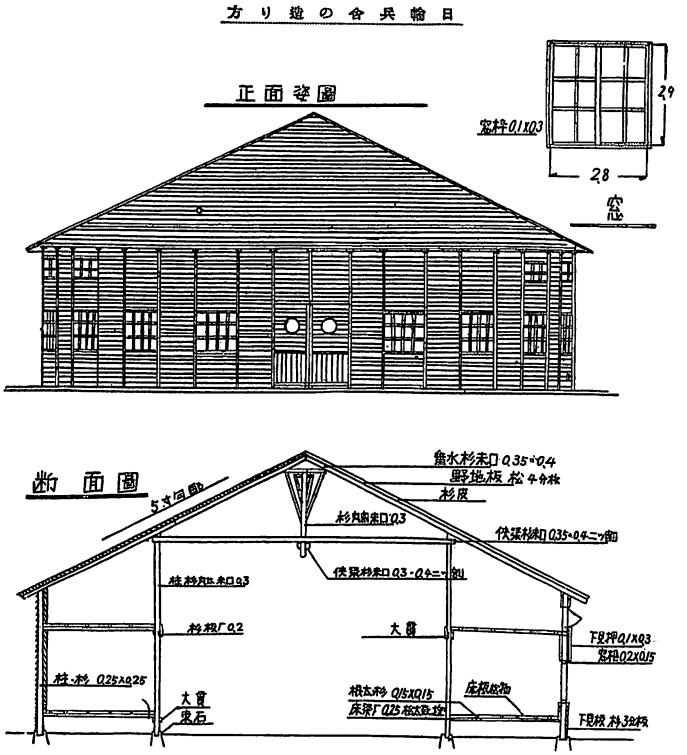

図2　日輪兵舎の「正面姿図」と「断面図」
（満蒙開拓青少年義勇軍訓練所建築課）
『開拓』第5巻4号（1941）

多かった（たとえば「内原だより」『新満洲』第三巻六号［一九三九］）。こうしたなかで、各地の学校教職員や農村の指導的立場にある人物が、内原訓練所体験入所の結果、その教育に刺激を受けて帰郷し、地元にも日輪兵舎を造るといったケースがしばしばあったようである。

とりわけ、義務教育界においては、一九四〇（昭和一五）年頃より「興亜教育」が提唱されるようになり、都道府県単位で一個中隊を成す「郷土中隊」の編成運動などがさかんになった。義勇軍募集の実績を上げるため、日ごろ児童・生徒に接する教職員にも興亜教育を施す必要があるとして、満洲移住協会は「興亜教育要綱」を定めて、高等小学校の二年担任教員を内原訓練所やその各地の修練道場で訓練を受けさせた。こうして、各地において修練道場の需要が一層高まったと考えられる。

実際、『新満洲』（後続誌名『開拓』）誌には、二度にわたって「日輪兵舎の造り方」と称する記事が掲載されており（『新満洲』第三巻八号［一九三九］および『開拓』第五巻四号［一九四一］）、内原訓練所以外の各種訓練施設において、日輪兵舎を新築するための情報が、広く必要とされていたことがうかがえる。

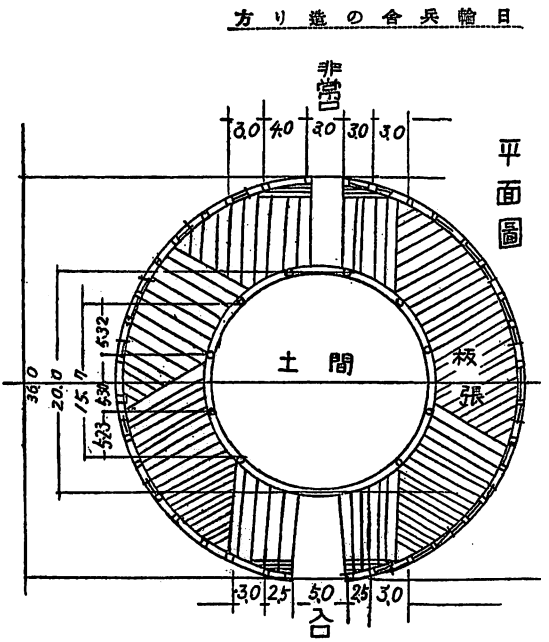

図3　日輪兵舎の「平面図」（満蒙開拓青少年義勇軍訓練所建築課）
『開拓』第5巻4号（1941）

（三）山形県にあった「日輪兵舎」

さて、これまでの調査の結果、山形県においては、現在のところ四ヶ所もの日輪兵舎の存在が確認されている。すなわち、竣工年が古い順に、柏倉門伝村（現山形市）の白鷹道場、旧蕨岡村（現遊佐町）の鳥海農民道場、金山町の神室修練農場、飽海郡高瀬村（現遊佐町）の西山農場である。このうち、神室修練農場と西山農場の日輪兵舎は現存している。まだ全国的な調査が途上のため確定的なことはいえないが、一県内に四ヶ所というのは全国的でも多い方であると考えられ、前述したように満蒙開拓の先進県であったこととの関連性も想起される。

次稿以降では、山形県内に存在したそれぞれの日輪兵舎に関して筆者が行った調査について、詳細を述べる。

注

（1）一八八四～一九六七。東京市本所に旧平戸藩士の長男として生まれ、東京帝国大学農科大学を卒業、愛知県立安城農林学校教諭などを経て、山形県立自治講習所長となった（一九二五年まで）。

（2）『拓け満蒙』誌は、移民事業の促進ならびに後援、調査、宣伝、紹介、斡旋、訓練などを行うことを目的に一九三五（昭和一〇）年に設立された満洲移住協会（拓務省の外郭団体）の機関誌で、一九三六（昭和一一）年より発行された。なお、途中で『新満洲』（一九三九年～）、『開拓』（一九四一年～）と二度誌名を変更しているが、巻数は連続している（不二出版より全巻復刻版あり）。

（3）一八八九～一九四九。退役後は庄内に帰郷し「東亜連盟」の活動を指導している。

（4）なお、渡満すると、「義勇軍」の名称は「義勇隊」に変更された。これは、「満洲にて軍と呼ぶのは穏当でないとの関東軍の意見」があったためともいわれる（満洲開拓史刊行会編　一九六六）。

（5）古賀弘人（一八九三〜一九四九）の経歴については、内原訓練所史跡保存会事務局編（一九九八）に詳細に明らかにされている。

（6）内原訓練所史跡保存会事務局編（一九九八）によると、終戦時には、内原訓練所には、日輪兵舎および同タイプの建物が三四七棟あったとあり、これは訓練所の建物の約八五％にも及んでいる。

（7）そもそも日輪兵舎には数種類の様式があり（「日輪兵舎の造り方」『新満洲』第三巻八号　一九三九）、大きさや素材も開拓地の状況にあわせるべきものとされていた。内原訓練所の日輪兵舎にもバリエーションがあった。

引用文献

内原訓練所史跡保存会事務局編（一九九八）『満州開拓と青少年義勇軍―創設と訓練―』内原訓練所史跡保存会、五〇八頁

内原町史編さん委員会編（一九九六）『内原町史　通史編』一二八五頁

上　笙一郎（一九七三）『満蒙開拓青少年義勇軍』中央公論社、二〇一頁

古賀弘人（一九三八）「なぜ日輪兵舎と称するか」『拓け満蒙』第二号三巻、三〇頁

佐倉浩二（一九四一）「満洲開拓演劇「日輪兵舎」と「先遣隊」」『新満洲』第五巻九号、九四―九七頁

櫻本富男（一九八七）『満蒙開拓青少年義勇軍』青木書店、二八九頁

佐藤源治（一九七七）『決戦下の山形県教育史』決戦下の山形県教育史出版協賛会、三七三頁

巽　聖歌（一九四四）『日輪兵舎の朝』大和書店、一八二頁

福田清人（一九三九）『日輪兵舎』朝日新聞社、三五一頁

藤原岳良編（一九七四）『満蒙開拓青少年義勇軍―第一次青年義勇隊柏根開拓団の回顧―』柏根会の回顧出版会、二四九頁

本誌特派員記（一九三八）「モダン日輪兵舎―満蒙開拓青少年義勇軍内地訓練所―」『拓け満蒙』第二巻三号、三一―三五頁

満洲移住協会宣伝部（一九三八）「青少年義勇軍の発足　先遣隊に殺到した青少年の意気」『拓け満蒙』第二巻四号、八―九頁

満洲開拓史刊行会編（一九六六）『満洲開拓史』九〇七頁

満蒙開拓青少年義勇軍訓練所建築課（一九四一）「日輪兵舎の造り方」『開拓』第五巻四号、一〇〇―一〇三頁

山形県編（一九七一）『山形県史　本篇4　拓殖編』一〇三一頁
（一九三八）「拓け満蒙地方めぐり3　山形県の巻　満洲移民発祥の地　割当の外に庄内郷を建設　流石に燃ゆる山形県」『拓け満蒙』第二巻二号、四四―四六頁
（一九三九）「内原だより」『新満洲』第三巻六号、一五四―一五五頁
（一九三九）「日輪兵舎の造り方」『新満洲』第三巻八号、一七〇―一七三頁